令和３年度 久留米大学外部評価報告書

１．総　評

2020 年度には、大学基準協会における第 3 期認証評価の受審を終え、適合の認定を得られたことについて、先ずは関係各位の御尽力に敬意を表するものである。長らく取り組んできた、自己点検・評価に基づく内部質保証の体制が、実際に展開し定着した結果といえるだろう。これまでの経過については、毎年度の外部評価委員会においてもその進捗状況の確認はできていた。評価項目によっては各年度により対応にばらつきはあったものの、全般的には年々向上の歩みが見て取れた。今後は、この展開・定着が質向上のサイクルとして継続的に循環・機能していくことを期待したい。その際には、構築できたと思われる内部質保証の体制 （基本設計）さえも、時機に応じて見直すことをいとわないことが肝要である。なお、認証評価の受審時にコメントされた改善課題については、継続的に粘り強く質向上に取り組まれることを望むものである。

今年度の外部評価委員会は、当初に予定されていた全面オンライン（ライブ配信）開催を、現地対面とオンライン中継とを組み合わせたハイフレックス開催に計画変更いただいた。関係者の方々の柔軟な対応に、委員一同、改めてお礼を申し上げたい。オンライン授業がそうであるように（ライブ配信であっても、オンデマンドであっても）、実際の教室で感じる臨場感は、委員会等の会議においても重要なものである。現地対面による開催によって、授業と同じく、ペース、トーン、コミュニケーション、レスポンス等を大事にしながら、委員会を進行することができたものと思う。

結果的にも、前年度の WEB 会議よりも討論は深まり、会議後の充実感も得ることができたと思われる。また、検討テーマを「教育課程・学習成果」に絞って頂いたことも、参加者全員が討論内容をより深めることに繋がり、会議後の満足感に反映したように感じられた。今後も外部評価委員会の実施方法や議題の選択などの改善に期待したい。

２．評価できる点

教育課程

学部長会議からの発信で行われた「卒業の認定に関する方針」「教育課程の編成及び実施に関する方針」及び「入学者の受入れに関する方針」の再整備（3 方針の一貫性を確保）が、第 3 期認証評価の受審において功を奏したことが見て取れる。体系性や一貫性の確認（内容更新）、社会への公表に関する工夫については、今後も継続的に取り組まれたい。

また、全ての学部（学科）・研究科の3ポリシーが大学の基本理念を踏まえて明記され、各学部・研究科の教育課程が、入学から学年進行を踏まえ卒業まで体系化されている。特に、アセスメントポリシー実施要領を定め、アセスメント・テスト・ルーブリックを活用して、学生の学習成果をリアルタイムで把握して対応していることは評価できる。

その他に、学生の成績開示後の成績確認申請制度の導入や、地域医療対応として、文系的視点を導入した文医融合を目指していることは、独自の試みとして新しい展開が期待できる。

学修（学習）成果

コロナ禍であっても、学生の学修成果を確保すべく、できる限りの工夫と対応で教育を継続されたことに敬意を表する。講義ばかりではなく、実習系の内容を大事にする授業においても創意工夫がなされ、教育効果の維持に注力されたようである。アンケート結果や成績評価を把握することにも取り組まれていた。

コロナ禍によるオンライン授業を代替措置として終わらせることなく、今後の教育展開に有効利活用すべく、継続的に取り組まれたい。例えば、高度メディアを利用した授業の、学内ガイドライン作成による制度整備も併せて重要になると思われる。

３．改善すべき点（今後の検討課題等を含む）

教育課程

大学院課程については、認証評価の受審時コメント（改善課題）に対する検討と検討結果の反映を進めて頂きたいと思う。また、その反映時には、学位授与プロセスの明確化に対する具体的な対応も講じられたい（内容の更新）。大学院教育については、先般の中央教育審議会大学分科会より示された「2040 年を見据えた大学院教育のあるべき姿～社会を先導する人材の育成に向けた体質改善の方策～（審議まとめ）」（2019 年 01 月 22 日）にも注目し、更なる改善に努められたい。学士課程については、2025 年度の新入生が大きなターニングポイントとして考えられる。高等学校では、2022 年度の新入生より、新しい学習指導要領での学びがスタートする（中学校では 2021 年度から、小学校では 2020 年度から）。『これからの社会が、どんなに変化して予測困難な時代になっても、自ら課題を見付け、自ら学び、自ら考え、判断して行動し、それぞれに思い描く幸せを実現してほしい。そして、明るい未来を、共に創っていきたい。』という思いが込められた改革である（文部科学省のウェブサイト：https://www.mext.go.jp/ shotou/new-cs/）。このような理念で学びを進めてきた生徒を大学に迎え入れるのが、2025 年度である。

新しい学習指導要領の内容を精査し、学士課程教育（入学者選抜・高大接続を含む）のアップデートについて検討を開始することが求められる。

学修（学習）成果

またコロナ禍の経験を次代の大学教育に活かす検討も重要である。コロナ禍によって、学生たちは大学キャンパスでの対面教育や対面交流の有用性や、キャンパスコミュニティ内で育ってきたことへの価値に注目が集まっている（キャンパスの価値再発見）。ところが、例えば、前述の「卒業の認定に関する方針」において多くの大学は、現在に至るまで、正課外の活動・教育による学生の成長を示すことができていない。教育課程（正課）を修める「学修成果」だけでなく、キャンパス内外での経験（正課外の学び）を踏まえた「学習成果」を考慮し、「卒業の認定に関する方針」を見直す（あるいは、別の方針を検討する）ことになる可能性は大きい。

こうした考え方は、成果の可視化と必ず紐付くだろう。これまでは（コロナ禍以前であれば）学修成果に着目してきたが、正課（カリキュラム）外における学生の成長を可視化することも検討対象となるであろう。貴学においては、「学修成果の評価に関する方針」の見直しに通じる可能性がある。

総じて、コロナ禍の経験を次代の大学教育に活かすべく、大学として検討する場の開催が重要となることは間違いない。

一方、コロナ禍対策としてのオンライン授業の教材開発やノウハウを蓄積・発展させ、アフターコロナ活用することも重要な課題であろう。ICT の進展は日進月歩で、コロナ禍は、わが国のそれを加速させるトリガーの役割を果たしただけという認識も忘れてはならない。

その他に、学生の授業アンケート結果を充分に検証して、必要に応じて具体的対応を取って頂きたい。その際、優れた評価を受けた教員をベストティーチャー賞などで評価する制度の検討もお願いしたい。各学生の成績をリアルタイムで把握して有効な対策を取るためには、ビッグデータ解析などが必要であり、専属の教員や職員を配置して大学の IR 室を強化して欲しい。学生成績だけではなく、IR 室の強化は極めて重要であると思われる。

おわりに、久留米大学の創設基盤である医学部・病院の全学的な共同利用の道を探索することは、大学全体の独自性をアピールする上で大変重要なテーマとなり得る。今後は AI や脳神経科学の進展に伴い、社会科学が脳神経科学との関連で理解されるようになるであろう。それを踏まえると、医学部・医学研究科と心理学研究科の協力を得て、文学部・比較文化研究科において脳神経法医学などへの展開はこれからの新分野になると思われる。このような視点からの研究チーム、引いては研究所の創設なども視野に入れて現有資源を活用頂きたい。

令和４年２月３日

久留米大学外部評価委員会
委員長　　瓦林　達比古　㊞
（一般社団法人福岡県社会保険医療協会理事長、福岡大学名誉教授）
委　員　　田中　　岳　　㊞
（国立大学法人岡山大学副学長、全学教育・学生支援機構 教授）
委　員　　本庄　春雄　　㊞
（独立行政法人国立高等専門学校機構久留米工業高等専門学校 校長）